

国家公務員の国際機関等への派遣体験談

氏名 : 中井 将人 (なかい まさと)
現在の所属・職名 : 世界知的所有権機関 (WIPO)
准計画官

派遣元省庁 : 特許庁
派遣期間 : 2024年4月～2027年3月 (予定)
派遣時の最終学位 : 学士 (法学)

<略歴>

2014年4月、特許庁入庁。総務部、経済産業省通商産業政策局、英国留学などを経て、2024年4月から世界知的所有権機関 (WIPO) に勤務し、日本政府の信託基金「Funds-in-Trust Japan Industrial Property Global (FIT Japan IP Global)」による途上国支援事業を実施。



筆者左端

Question 1 WIPOへの派遣を希望することとなった経緯について、教えてください。

特許庁に入庁して以来、国際業務や海外留学の経験を通じて、いつか海外勤務をしてみたいとの思いを強く抱くようになりました。特に海外留学での経験から、日本という国を客観的に見る視点を得ると同時に、国際的な課題に自分の力で貢献できる場への関心も高まりました。こうした経験から、知的財産制度を通じて国際的な課題解決に寄与するWIPOの役割や、多様な国・地域の関係者と協力して事業を進める仕事に魅力を感じるようになりました。

また、特許庁は長年にわたりWIPOへの職員派遣を積極的に行っており、日本の知財を通じた途上国支援の国際的プレゼンス向上に貢献しています。実際にWIPOに派遣された経験のある先輩方からは、国際協力の最前線で多様な国々と協働しながら事業を実施する面白さなど、具体的なやりがいも聞いていました。

さらに、派遣先ポストで担当するFIT Japan IP Globalの活動にも強い関心を持ちました。FIT Japanは、1987年に日本政府によるWIPOへの任意拠出金を基に創設されて以来、途上国や後発開発途上国 (LDC) における知財制度の整備や能力強化を支援する事業を展開し、日本の国際的プレゼンスを高めてきた長い歴史があります。現在は約120の国に対して、知財庁向けの支援だけでなく、中小企業やスタートアップ、女性・若者の支援、グリーン技術の普及など多岐にわたる事業を通じ、知財をイノベーションの基盤として途上国に浸透させる役割を担っています。

こうした背景からWIPOでの勤務を希望し、実際に今現地で仕事をしてはいますが、日々、多様なバックグラウンドを持つ職員とともに業務を進める中で、多くの刺激と学びを得ており、自身の専門性や国際的な視野を一層広げる貴重な機会となっています。

Question 2 選考プロセスについて、教えてください。

特許庁内での選考を経た後、WIPO側での選考に進みました。WIPOではまず書類審査が行われ、これまでの業務における成果や派遣先業務への貢献度を評価されました。

次の段階はオンライン面接で、WIPO人事部と派遣先部署によって行われました。面接はすべて英語で、約45分間にわたりました。質問は、いわゆるコンピテンシー・ベースド・インタビューとして「これまでの仕事でどのような困難を乗り越えたか?」、「意見の違いから同僚と衝突した際にどう調整するか?」などに加え、派遣先業務に関連して「これまでの経験をどのように派遣先で活かせるか」「FIT Japanが支援する事業をどのように改善できるか」といった具体的な質問に答えました。

最終的には、派遣元・派遣先双方の合意を経て派遣が決定しました。通常業務に並行して、WIPOや派遣先ポストの役割や業務について調べて応募書類作成や面接準備を進めることは大変でしたが、改めて自分の経験や強みを言語化する良い機会になりました。また、自分の経験を「特許庁の中の話」としてではなく、「国際的な文脈の中の一部」として捉え直すことができたことは、派遣前からすでに得難い学びだったと感じています。

Question 3 着任にあたり苦労した点について、教えてください。

着任時は、業務面と生活面の両方で想像以上に苦労したことを覚えています。

まず業務面では、他の国際機関同様に多国籍・多文化の職場環境に慣れるまでに時間を要しました。議論の進め方や意思決定のスピード、事業実施までの時間軸は日本の官庁とは大きく異なり、これまで培ってきた日本人的な感覚や考え方が通用しない場面も多かったです。

また、私が担当するFIT Japan IP Globalは、現在WIPO内の27の部局と連携し、年間約120もの事業を途上国向けに実施しています。内容は知財庁向け支援に限らず、中小企業やスタートアップ、女性・若者の支援、グリーン技術の普及など多岐にわたります。通常の職員であれば、1つの地域や分野に特化して業務を行いますが、私の担当事業は対象地域が世界に広がり、内容は多様で、協力部署も多岐にわたります。そのため、常に全体を俯瞰しつつ個々の事業の目的や背景を把握し、関係者間の調整、進捗管理、成果把握など高度なマネジメント能力が求められます。

さらに事業毎に協力する部署が異なるため、それに応じてコミュニケーション方法を変える必要があります。例えば、ミーティングは対面かオンラインのどちらを好むか、真っ先に本題に入った方が良いか雑談ベースで話を進めた方が効果的かなど、各担当者の文化的背景や性格に応じて、アプローチを柔軟に組み立てることが不可欠です。

Question 3 着任にあたり苦労した点について、教えてください。
(続き)

当初はその複雑さに圧倒されましたが、各部署と何度もコミュニケーションを重ね、異なる業務慣行を理解しながら協働することで、次第に信頼関係を築き、現在はより円滑に事業を進められるようになってきたと感じています。

一方で、生活面でも多くの苦労がありました。家族、特に生後半年の子どもを帯同しての赴任だったため、住居探しや子どもが将来通うであろう保育園探し、地域医療の理解など、着任時は生活基盤を整えるのに奔走したのを覚えています。例えば、乳幼児の予防接種のスケジュールや内容は日本とジュネーブとで若干異なるため、日本の母子手帳を英訳するとともに、その内容や日本での接種歴を子どものかかりつけ医に丁寧に説明する必要がありました。

また、現在子どもが通っている保育園の言語はフランス語であるため、園での様子や連絡事項を理解し、先生方や他の保護者とコミュニケーションを取るためには、私自身がフランス語を学ぶ必要がありました。加えて、現地の子育てコミュニティとのつながりづくりや、日常の買い物などの生活全般でも、日本とは異なる文化や習慣に触れるたびに、その都度試行錯誤を重ねてきました。

このように海外赴任では業務以上に生活面で大小さまざまなチャレンジが付きものですが、それらを乗り越える過程そのものが、自分と家族にとって大きな成長の機会となっていると感じています。

Question 4 WIPOの仕事の特徴や担当した業務の内容について、教えてください。

WIPOの最大の特徴は、その名称のとおり、知的財産権の保護・活用を通じて各国の発展を支える点にあります。道路や建物といった形のあるインフラと異なり、知財の価値はすぐに目に見えるものではありません。そのため、「なぜ知財が自身のビジネスや各国の経済成長、イノベーションにとって重要なのか」を、具体的な事例や成果を通じて分かりやすく伝えることが、途上国支援を行う上で非常に重要だと感じています。

私はその中で、日本政府からの任意拠出金（FIT Japan）を活用した事業の企画・管理を担当しています。具体的には、WIPO内部から寄せられる多様な事業要望について、内容や目的を精査しながら実施案件を選定し、それを基に1年間のワークプランを策定します。加えて、拠出金の割当てや支出管理、各プロジェクトの進捗管理・サポートなど、事業全体の運営も担っています。昨年度は、拠出金の約170%に相当する事業要望があり、拠出元の特許庁や関係部局と密に調整しながら採択事業を決定する作業は大きな挑戦でした。

Question 4 WIPOの仕事の特徴や担当した業務の内容について、教えてください。（続き）

確定したワークプランを実施する段階では、FIT Japanによる支援が適切に可視化されるよう配慮しており、日本政府からの事業冒頭の挨拶やプレゼンテーション、広報物や関連資料へのロゴ表示などを通じ、日本の貢献が関係者に伝わるよう調整しています。

その一環として、事業の成果を関係者に広く発信する重要な機会となったのが、2024年12月にWIPO本部で開催した「開発と知的財産委員会（CDIP）」のサイドイベントです。私は、FIT Japanの成果を紹介するパネルディスカッションと展示の企画・運営を担当しました。パネルディスカッションでは、FIT Japanの支援を受けた起業家らが登壇し、知財を活用してブランド価値向上や雇用創出、事業拡大を実現した経験を自らの言葉で紹介してもらいました。また、展示では、女性起業家や中小企業、若者など多様な受益者の成功事例を紹介しました。特に女性起業家の農業製品や伝統装飾品は来場者の関心を集め、知財が製品価値を高め事業成長に貢献していることを直感的に伝えました。

こうした受益者のストーリーや具体的成果の可視化は、まさに「なぜ知財が自身のビジネスや各国の経済成長、イノベーションにとって重要なのか」を体現したもので、知財の活用が受益者の事業拡大、社会的インパクト創出につながっていることを参加者に強く印象づけました。私自身も、抽象的に語られがちな知財の価値が、現場のストーリーとして具体的に可視化される瞬間に立ち会い、大きな達成感を得ました。

このように、FIT Japanの役割は、単なる事業への資金支援にとどまらず、「知財を軸とした持続的な成長の仕組み」の構築に貢献しています。その過程では、国ごとの制度や文化の違いを尊重しつつ共通の目標に向かって協力する姿勢が不可欠となりますが、国際協力の現場で専門性を磨きながら、日本が国際社会で果たす役割の大きさと意義を改めて実感しています。



筆者右端。サイドイベントにて同僚、パネルディスカッション登壇者らと撮影

Question 5 派遣を通じて得たことや、派遣経験を今後どのように活かしていきたいかについて、教えてください。

国際機関という多国籍・多文化の環境で働くことは、単に業務をこなすだけではなく、自分の意見を相手に正確かつわかりやすく伝える能力が求められます。同じ日本人同士であればある程度の共通認識で理解が進みますが、国際機関では前提が各人で異なるため、「言わなければ伝わらない」文化です。そのため、相手に理解してもらえるように説明力やプレゼン力を意識的に磨く機会が多く、これは派遣を通じて得られている貴重な経験だと感じてします。

また、WIPOでの業務を通じて、国際的な人脈を築けている点も大きな収穫です。こうして得た関係は、単に業務上のつながりにとどまらず、国際協力の課題に取り組む上での貴重な情報源や助言を得られる財産であり、今後のキャリアでも大いに活かしていきたいと考えています。

さらに生活面でも多くの気づきがあります。ジュネーブでは、平日は業務に集中しつつも家族と過ごす時間を確保しやすく、日本と比べてワークライフバランスを取りやすい環境にあります。また、街中では子どもに優しく声をかけたり接してくれる場面が多く、ジュネーブは子どもに対する社会的許容度が高いため、安心して子どもを育てることができます。さらに、週末には近隣国への旅行も容易で、家族での貴重な体験の機会も多く、日常生活の充実にもつながっています。このように、ジュネーブでの生活は、家族との時間を大切にしながら働くことの価値を実感できる環境となっています。

これらの経験は、日本を離れ、国際的な現場で直接体感してこそ得られたものであり、日本よりも良いと感じた点を学びとして取り入れ、今後の業務や生活に積極的に活かしていきたいと考えています。

Question 6 将来的に国際機関への派遣を希望する職員へのメッセージをお願いします。

国際機関での勤務は、日々が学びと挑戦の連続です。文化や言語、働き方の違いに戸惑うこともありますが、その分、視野が広がり、自分の強みや課題を客観的に見つめ直す機会にもなります。

海外勤務を考えている方には、まず「自分が国際社会で何をしたいのか」を明確にしておくことをお勧めします。その上で、語学や専門性を磨き、国際的な課題に関心を持って日々の業務に取り組むことで、きっと道は開けると思います。国際機関での経験は、必ず将来の大きな財産になると感じています。